

## 著者の言葉

2015年8月25日に「日英同盟—同盟の選択と国家の盛衰」をKADOKAWA ソフィア文庫から出版しました。日英同盟が締結されたのは103年前の1902年で、学ぶには古すぎると思われるでしょうが、日英同盟では統帥権問題や戦域制限の日本独特の問題など、現在の憲法とか集団的自衛権などの類似した問題が生起し、日英両国を離反させました。

本書では日英同盟と日米安保を対比しつつ、同盟の選択と国家の盛衰を視座に、同盟政策の利点や欠点、日英同盟の価値と継続の困難さ、日英同盟の変質に対する日本の対応を考究しました。特にポピュリズムに迎合し同盟国の英国を敵とし、大東亜戦争に突入してしまった過程や、当時の政治指導者や扇動するジャーナリズムの問題など、日英同盟と日米安保の間には多くの類似点があります。

また、東南アジア連合(ASEAN)や、拡大アセアン・フォーラム(ARF)などの多国間安全保障体制を、「太平洋に関する四カ国条約」や「中国に関する九カ国条約」に、大東亜共栄圏を「一帯一路」の中国のユーラシア共同体に、ワシントンやロンドン軍縮条約を核拡散防止条約など、国連が決議した平和に関する条約や決議に置き換えると、国益で動く国際機関の安全保障に対する限界など、学ぶべき多くの遺訓が見出せるのではないのでしょうか。

本書により21世紀の日本の安全保障政策に歴史的・戦略的思考が加えられることになるならば、これに過ぎる喜びはありません。空虚・無意味な国会の議論を消滅する多くのヒントがあると思いますので、お読み戴き友人などに紹介戴ければ幸いです。